

大日本帝国海軍大型汎用指揮巡洋艦 藤田《鈴谷》浩之

元ネタ：AQUAPLUS「To Heart」「Leaf Fight」藤田浩之

日本海軍が 相川《古鷹》真一郎()と同じくマル八計画において建造した新型巡洋艦。第三次大戦後期に前線に投入され、それまで巡洋艦の手駒不足に苦しんでいた日本海軍、特に旧八八艦隊勢力を補完する役割を果たして活躍。戦後は10-4-10-10計画の艦船が登場するまで日本海軍水上艦の主役の座を占め、一部は第四次大戦にも参加した。長射程の誘導弾を始めて搭載するなど、艦船の電子化がそれまでと比べて著しかった為、システム艦の奔りという評価が今日ではされている。

建造の経緯

第二次大戦終了後実働した、日本海軍の戦力整備計画であるマル八計画の策定段階において、相川《古鷹》真一郎()設計案がそれまでの砲戦型巡洋艦の最終発展系として登場したのに対し、藤田《鈴谷》浩之 は誘導弾・指揮通信設備等を重視した異色の設計案として候補に登場した。第二次大戦において巡洋艦を含む補助艦に不可欠の能力となった対空・対潜能力に関しても努力がなされており、一種の万能艦が目指されていた。マル八計画において従来の重巡と軽巡という区別は消滅し、「大型砲戦巡洋艦」と「汎用巡洋艦」の2種類をそれぞれ1クラスずつ多数建造する事によって日本海軍が長年苦しんでいた巡洋艦戦力の不足という問題を一気に解決せんとしていたが、相川《古鷹》真一郎()が各国に対抗する「大型砲戦巡洋艦」としての設計案だったのに対し、藤田《鈴谷》浩之 は当初ワークホースとしての「汎用巡洋艦」としての計画だった。この中で 藤田《鈴谷》浩之 は最上級、あるいは計画に終わった利根級といった大型軽巡洋艦の後継という位置付けで計画されていた。この艦の計画を進めていたのは戦後その勢力をますます増していたエクストリーム主義者で、第二次大戦における経験、琴音 や 初音 そして 月島 がもたらした戦果から電子装備の重要性について認識していた彼らはそういった先進的な装備をこの艦に施そうと考えていた。また太平洋戦争後、損傷の大きさから新型設備の実験艦として運用されていた HMX-13《駿河》セリオには既に対空誘導弾の試作型が搭載されており、彼らはこれを搭載する事も見込んでいた。むろん水上砲戦についても怠りは無く、相川《古鷹》真一郎()と同じくスライド式閉鎖機構と全自動給弾システムを採用し、簡易型の弾薬一体型の簡易薬筒を使用した新型の20センチ砲が搭載される事になっていた。この他にも新型の対空砲や対潜用の誘導魚雷、さらに水上機に換わる新たな艦載航空機として回転翼機等の搭載なども見込んだ結果 藤田《鈴谷》浩之 の設計案は次第に膨張して行き、最終的には 相川《古鷹》真一郎()とほぼ同サイズとなった。特に、誘導弾のレーダーや電子設備などが誇大化し、艦のほぼ半分を占拠していた。海軍はここで一時大いに悩むことになった。藤田《鈴谷》浩之 の能力の高さには期待していたが、設計案通り建造した場合とてもではないがワークホースとして多数建造するのは不可能な大きさと価格であったからだ。かといって、藤田《鈴谷》浩之 は捨てるには惜しすぎる。デ・モイン を筆頭とする合衆国の巡洋艦や、ドイツ海軍の装甲艦勢力に対抗する為には 相川《古鷹》真一郎()は必要不可欠であるという事はわかっていたが、この艦は水上戦闘能力を重視した結果として対空・対潜能力が平凡以下であったからだ。日本海軍もそれは承知の上だった。承知の上で 相川《古鷹》真一郎()を建造し、それを補完するものとして「汎用巡洋艦」を建造するつもりだった。だが「汎用」という概念は突き詰めれば際限なく誇大化する可能性を秘めていた事に、彼らは気付いていなかったのだ。

特徴

最終的に 藤田《鈴谷》浩之 は「ワークホースとしての汎用巡洋艦」ではなく、「艦隊の要としての大型汎用巡洋艦」として、古鷹 とほぼ同じ船体を用いて建造されることになった。藤田《鈴谷》浩之 をそのような位置づけとした最大の理由は、この間のサイズが大きくなった原因と同じ大型対空誘導弾だった。それは当初 HMX-13《駿河》セリオ に試作型が搭載され、後に 藤田《鈴谷》浩之 への搭載が決まった八式長距離対空誘導弾である。後にこれを原型とする十式対艦誘導弾が開発される、八式対空誘導弾と共にいわゆる「イージス&スタンダード」時代以前の対空誘導弾として名を残すことになる兵器だった。八式長距離対空誘導弾は第二次大戦における戦訓、特に英本土防空戦及び合衆国の「ダウンフォール」作戦における教訓を基にして製作された、最大射程 120 キロに達する当時としては怪物的な誘導弾だった。その長大な射程を実現する為にミサイルはインテグラル・ラムジェット推進、さらにはロケットブースターを追加して飛行することになっており、その重量は一発あたり約 2.8 トンというそれまでとは規格外の大きさだった。そして 藤田《鈴谷》浩之 は第三次大戦においてこれを搭載したほぼ唯一の艦となる事になる。なぜならこの誘導弾はそれを搭載する為に艦の側に相応しい大きさを求めており、またそのための専用レーダーや誘導装置もこれまた従来のそれと比べれば遙に大きかったからだ。無論試作型が開発された当時において、この新兵器はまともなウェポンシステムとは言いがたかった。飛ばすミサイル本体はもちろん、誘導する為のレーダーやミサイル用のアンテナ等に問題は山積していたからだ。民間も含めた開発陣はそれを一步一步乗り越えていった。最終的に 藤田《鈴谷》浩之 が搭載したのは当初に予定より 2 年遅れて八式対空誘導弾とほぼ同時期に登場したタイプだった。70 年代半ばまで改良計画は継続され、2 つの「タイプ・エイト」は日本海軍を象徴する誘導弾となる。

兵装

藤田の兵装の配置は、装備するものは違えど 相川《古鷹》真一郎() とほぼ同じである。前部に六式 20 センチ砲が 3 連装 2 基背負い式に装備され、さらに対艦 / 対空兼用誘導弾連装発射装置をその背後に搭載している。ただし 相川《古鷹》真一郎() と違い、対空誘導弾だけでなく対艦 / 対潜兼用の噴進滑空誘導魚雷を多く搭載していた。艦橋の上部には誘導弾用のイルミネーターが 2 基配置され、相川《古鷹》真一郎() との識別上のポイントとなっている。艦の側面には六式 12.7 センチ高角砲を 6 基装備し、61 センチ 5 連装魚雷発射管、ポフォー ス 40 ミリ及び 20 ミリ機銃を搭載していた。そして艦の後部を占めているのが、八式長距離対空誘導弾を装備した連装発射装置及び、それを誘導する為の巨大な 2 基のイルミネーターである。回転翼機の発着甲板は最後尾の部分となっている。

船体

船体・機関は 相川《古鷹》真一郎() とほぼ同様、特に機関は全く同一である。無論これは少しでも共通性をあげることによって建造機関及び費用の短縮削減を狙ったものである。ただし 藤田《鈴谷》浩之 の艦容は艦橋の構造が指揮設備の大型化及び電子装置の多数搭載の結果（八式誘導弾の誘導装置は艦橋の上に置かれていただけでなく、より広い視野を狙って多数の電探や電子装置が艦橋上部周辺及びマスト周りに配置されていた）相川《古鷹》真一郎() とは大幅に異なる事、また後部に配置された八式長距離誘導弾用の巨大な誘導装置もあいまってかなり偏ったものとなっており、これを見たものは皆一様に「いつもダルそうに見える」という印象を（好意的だった 保科《天城》智子 の艦長ですら）持っていた。また装甲の厚さや防御範囲は 相川《古鷹》真一郎() とほぼ同じであるものの、特に多数搭載されたレーダー及び電子装置や誘導弾発射装置は当然非装甲である為、藤田《鈴谷》浩之 を操る艦長は水上砲戦に積極的でなく、それが艦容から受けるとあいまって、「汎用的な巡洋艦の性能を持った指揮艦」としての本型としてはいささか不当な批判をされることもあった。ただしマルタ沖において

は長距離からの対空誘導弾の対艦発射と噴進滑空誘導魚雷、さらには前部に集中された、江藤や デ・モイン に匹敵する 84 発 / 分の発射速度を誇る六式 20 センチ砲を活かして見事な戦いぶり (当時の艦長によれば「主役の意地」) を見せている。

要目 (新造時)

- ・基準排水量：24,920 t (満載 33,170 t / 常備 29,370 t)
- ・全長：222.6 m
- ・全幅：23.2 m
- ・喫水：8.1 m
- ・主機：重油専焼缶 6 基蒸気タービン 4 基 4 軸
- ・蒸気温度：450 度
- ・蒸気圧力：40 気圧 (過飽和蒸気)
- ・出力：220,000 馬力
- ・最高速力：33.1 ノット
- ・航続距離：15,000 海里 (18 ノット)
- ・燃料積載量：3,200 t (重油)
- ・兵装
 - ・主砲：六式 55 口径 20.3cm 自動砲 3 連装 2 基 6 門
 - ・高角砲：六式 65 口径 12.7cm 半自動高角砲連装 6 基 12 門
 - ・魚雷：九二式 61cm 水上旋回発射管 5 連装 2 基 10 射線
 - ・機銃
 - ・ポフォース 40 4 連装机銃 8 基
 - ・20 3 連装机銃 12 基
 - ・誘導弾
 - ・八式長距離対空誘導弾発射装置連装 1 基
 - ・八式対空 / 対艦誘導弾発射装置連装 1 基
- ・装甲
 - ・舷側：178 (15 度傾斜)
 - ・甲板：104 (上甲板) / 127 (舷縁)
 - ・司令塔：203
 - ・砲塔：203 (前循) / 127 (側面) / 76 (天蓋) / 57 (背面)
- ・艦載機：萱場七式回轉翼機 2 機
- ・乗員：871 名 (司令部要員含む)